
君に届け ~君のそばで~

青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に届け　～君のそばで～

【コード】

N09290

【作者名】

青

【あらすじ】

君に届けの中に出てくる龍と千鶴の話

幼馴染という近い存在の龍と千鶴。

比べようのない大切な存在であることはわかっていたがその想いをうまく伝えることができないでいた。

第一話（龍視点）（前書き）

椎名軽穂さんの「君に届け」の龍と千鶴メインです。

漫画のエピソードを二人の視点で書いたりオリジナルも書いていきたいと思っています。

第一話（龍視点）

気づいたら、いつもそばにいて。

気づいたら、一番大切な存在だった。誰とも比べられない存在。

この感情の意味を知ってるから俺にデッドボール以外に怖いものが
増えた……。

高校1年のある日

「……であるからして……」

老いた先生が一人、黒板の前で板書の説明をする。

俺の視界には翔太がいて、黒……山？と矢野って女子、そして
騒がしく矢野に話しかける千鶴がいた。

いつもの昼下がり、この窓際が一番後ろは心地いいから俺の特等席。

「だからさー、矢野ちゃんたのむよー!!」やはり騒がしい……

「ちづはノート貸してもコピーして満足するからいけないうって言っ
てんの！爽子！ちづのためにも簡単にノート貸したりしちやだめだ
よ」

怒る矢野、おろおろする黒山、笑う翔太。

寝れなくて不機嫌になることはあるものの、こっから見える感じも
俺の特等席としての価値をあげてるかもしれない。

矢野と黒山は高校から、翔太と千鶴は前から。

千鶴はもう十年以上の幼馴染というか腐れ縁だ

最初が何時でどういう風にかも記憶にないが千鶴に会い8つ違いの兄ちゃんから二人面倒を見てもらってた。だいたい一緒に遊んでたから三人兄弟みたいと周りからは言われていた。

その頃から千鶴はあんなだ。

自分の感情をむき出しにして相手にぶつかりちよつとわがまま、よくしゃべり男勝り。

そんな千鶴と育ったせいかな俺は感情を出すのが下手で、身内からおとなしいといわれるようになってた。まあ、家族や翔太なんかは多くを語らずともわかってくれるし千鶴に関しては「言ってくれねーとわかんねーよー！」とか言いつつも知られたくない心の中まで読み取るまでになってた。

授業も終わり部活も終わった。

ずっと続けてきた野球、北幌高校は甲子園出場経験もあるがここ数年は結果が出ずいわゆる古豪などと言われるような学校になっていた。

そんな高校が近くにあり入学できたのは思えば幸運だったのかもし

れない。翔太のリトルリーグ時代のコーチをしてたというピンも顧問で強豪へと復活させると意気込んでる。

中学で部活を引退したあと地道に自主練をやってきたこともあって高校野球というレベルに早く慣れていけたのが良かったのかレギュラーに入れて最近は四番にも置かれるようになった。

しかし、うまくいかない日もしばしばあり自主練はかかさない。

暗くなったグラウンド、ベンチ付近の灯りの下で黙々とバットを振った。

学校につけられた時計の文字盤も良く見えない……

するとバックネット越しに俺を呼ぶ千鶴の声がした。

「りゅーうー、そろそろ帰らないかー？」

「……ああ、着替えてくるから待ってる」

「おう」手を挙げて応える千鶴。

二人で歩く帰り道

「……なんで学校に残ってた？」千鶴が一人学校にいるのは見たことがない。

「補習だよ、矢野ちゃんと爽子にノート借りれたからなんとかなったけどね」

授業中に騒いでたのはそのためか・・・

「それでも、こんな時間にはならないだろ」

「そ、それが、矢野ちゃんが帰り際に怖い話をしてきてさー・・・そんなスリル一人で味わうのはもったいないと思ってたら龍が素振りしてたからー」

要は一人帰るのが怖かったのだ。千鶴は態度のでかさの割に昔から怖がりで特にお化けとか幽霊とかいう類が苦手だっことを当然知っていた。

隣では千鶴が大声でその矢野から聞いたという怖い話とやらを話しているが話している自分自身が怖がりをはじめて動揺し慌てて話題を変えていた。

「そ、そうだ！徹！徹は帰ってくるとか連絡ないの？」

「ねーよ。あつたら千鶴にも言っし・・・」

あからさまにしゅんと物思いにふけると、すぐまたパツと顔を明るくさせ兄ちゃんとの思い出を話だした

千鶴はあたかも俺が知らないだろうと話すが実際はだいたい俺も一緒にいたんだからわかっていたりするのだが、何も言わずただ相槌をうち聞いてやる。こんなことはしばしばだし千鶴が兄ちゃんを好きであることも知ってる俺にとっては複雑な気分になる瞬間でもある。

でも、こうやって二人で歩く帰り道も大事なのかもなと夜空を仰いだ・・・

第二話（前書き）

雨の日の話です。

第二話

朝は正直言っ て苦手だ。

どのくらい寝ても、十分寝たということはない。

だから、あと10分いや5分寝ていよううZZZZ

すると階段を爆音で駆け上がる音、こんな音を出すのはあいつだけ・

・

「龍！ほら起きろ！学校行くぞー」戸をあけるなり大声で入ってきた

「……まだ眠い……」

「おら、起きろよー」ベッドで布団にくるまる俺を蹴ってくる

「……痛い、わかったから」といいつつもと丸くなる

「わかってないじゃん！おいっ」強引に起こそうと千鶴が近付くと俺の寝返りがかぶり顔が近くなってしまった。千鶴の顔が赤くなる。

まったく何がしたいんだよ……と言いたくはなったもののこんな目覚めも悪くない

「おはよ、千鶴」目を合わせようとしない千鶴に呼びかける

「お、おう……んじゃ下行ってるから」

思わず微笑んでしまっていた。せつかく起こしてもらったんであくびをしながら起き上り制服に着替える。そーいえばなんで起こしに来たんだ？

下に降りると千鶴がエプロンをつけ台所に立っていた

「なにしてんの？」

「おばちゃんが仕事で早く出なきゃ行けなくておっちゃんは仕方みらしくておばちゃんが家の母さんに籠のことを頼んできたんだよ。おかげであたしが早起きするはめに……」
「なにやらぶつぶつ言いながらも朝食は作ってくれたらしい。」

「いただきます。」

千鶴の作ったものを食べるのは久しぶりだ
不器用ではあるが料理は下手ではない。兄ちゃんに食べさせようと練習したんだろう。

「ほら、卵焼きー」なにをつくったかと思えばこれだ

前からこれはすごい自信を持って作っていた。俺の好物でもある。

「どっ、うまい？」

「ん、いつもどおり・・・」

「なんだよ、うまいって言えよ！」

俺の中ではいつもどおりうまいって意味ではあったんだけど・・・
ま、いいか

「んじゃ、おっちゃん行ってくんねー。ご飯は台所にあるから」
仕込みをしていた親父に話しかける。

「おう、面倒かけたなーありがとう。雨だけど元気に行きな！」
戸をあけると確かに雨だった。

「傘、一本しかねーぞ？」

「しょうがない、2人で入ってくか」確かにそうするしかないがあまり乗り気にはなれない。

「よし、おっちゃん行ってきまーす！」
「行ってきます」

雨の通学路、矢野や黒沼の話、球技大会の話を喋りまくる。千鶴が女友達のことをここまで話すのは珍しいことではあるが、俺はそれ以上に千鶴が濡れないようにと気遣い歩いた。

今日も授業は寝て過ごす・・・

なんだかいつも以上にだるい・・・

「龍、大丈夫か？なんだか顔赤いぜ？」翔太が話かけてきた。

「ああ、多分・・・」

「龍、どうしたのー？」千鶴、矢野、黒沼が寄ってくる

「なんだか具合悪そうなんだよ」

千鶴が俺の額に触れてくる・・・冷たくてホツとする。

「やば！めっちゃ熱いよ！！」

「・・・ちづー？アンタ朝、龍の傘に入れてもらってたって言ったな
かった？」矢野がなにか思いついたように話出した。

「龍、アンタちづ濡らさないために傘ほとんど使えてなかったんじ

やないの？」

「・・・ああ、まあ」ここで嘘言ってもしょうがない

「え、え！い、いやそんなことしてくれなくてもよかったのに」一番驚き慌て始めたのは千鶴であった。それに続いて黒沼、翔太まで慌てる。

「大丈夫、部活には出れる・・・」立とうとしてよろけ翔太に支えられる。

「そんなんじゃないよ！」

「私も無理しないほうがよろしいかと・・・」

するろそこへ帰りのHRにピンが入ってくる。

「おら、お前ら座れー！ちゃっちやと終わらせるぞー。その5人組も座れってーの！あ、あと龍！今日は練習は自主練にするから、俺様のスペシャルメニューやってるお前はしっかり休んどけってんだ！ガッハッハ」

俺の体調を知ってか知らずか、多分まったく知らないだろうが・・・今日は休むことにした。

「大丈夫か龍？」翔太はまだ心配らしい

「ああ、雨もそんなじゃないしそれに・・・」顔あげると千鶴が俺のバックをすでに持たれていた

「ちづが責任を持って送るしね」と矢野が千鶴の肩をたたく

「なんてーか、あたしのせいでもあるからな……」どうやらそれなりに責任を感じてるらしい

「ああ、たのんだよ」小さくなる千鶴を見てたらなんだか笑えた。

「ハア！何笑ってんだよ、だいたい日頃のトレーニングが足りないんだ！イテツ！何すんの矢野ちゃん！？」千鶴の頭に矢野がチョップをくらわせる

「そのトレーニングのやりすぎで疲れもたまってるから風邪ひいてんだろぅが！バカタレ！！……まあ龍も良くこんなのを……」
どうやら俺の気苦労もわかってくれたらしい

「あ……真田くん、こちらを……」黒沼が1枚の紙を渡してきた。

「……風邪に良く効く料理のレシピ……」

「はい、風邪はひき始めが肝心なので！」とてもまっすぐな奴だと思っただ。翔太が褒める理由がわかる。

「んじゃそれ、あたしが作ってあげるよ」千鶴が張り切りだした。

「いや、母さんに……」なんかめんどくさそうと思っていると

「あたしがつくるんだっ！！」

俺の手をひっぱり歩き出した・・・今度は少しだけ肩が濡れるくらいに傘を分け合って。

「風邪も悪くない・・・」

「ハッ！バカなこと言ってんじゃないよ」「そう言う千鶴の顔は怒ってなかった。」

第三話（前書き）

第三話です。

龍が風邪ひいたの話を引き続き・・・

第三話

俺がふらふらしてゆっくり帰ることしかできずいつも以上に時間がかかる。

普段からピンの特別メニューをこなしてもこうなんだから風邪をなめてはいけない・・・

そういえばあんなに話していたのに途中から千鶴がしゃべらなくなつた。

「・・・なんでしゃべらないの？」

「あたしだって、責任ぐらい感じんだよ！別にあたしに傘貸してまで濡れることなかつたんだ。」

俯く千鶴・・・いつの間にそんな気遣いができるようになったのか、俺の知らないところで不器用ながらも立派に女の子になっていたんだな。

ほんとならそんな姿に惚れ直したりするのもかもしれないが、小さいころから一緒に育つた俺にとってはそれは笑える以外の何物でもないってことになる。

「別にいい、俺がやりたくてやったことだから。」

小さくなつた千鶴に肩を回し体を預けてやる。最初は驚いたようだ

がすぐにしつかり踏ん張って支えてくれた。

「龍には支えられてはっかだかね、今日ぐらい支えてやるよ!」
満面の笑みで答えてくれた。

俺にいつも支えられてなんていうけど、俺だって千鶴の存在に支えられてると実感していた。

「・・・お互い様だ。」

「えっ?なんて?」

「なんでもねーよ」聞かれなくてよかったとおもった。聞かれてたら俺に借りを作ってるって考えをなくしてこんなことなくなるかもしれないから。

家までの帰り道はそこから、2人で小さい頃に戻ったかのように笑顔で帰った。

やっと家に着いた。

千鶴が戸を開けてくれる。

「おっちゃん、ただいまー」
「・・・ただいま」

「おう、おかえり。なんだ2人で帰ってきたのか！」明るく迎える親父

「それがさー、龍が風邪ひいちゃったみたいでさー」

「風邪ひいただあ！？野球バカの癖に風邪なんかひいてんじゃねーってんだ、ワツハハハ」親父は客と笑いあった。

「まあ今日は町内会の会合あるからもうすぐ閉めるからよー、手伝いはしなくていいから部屋でおとなしく寝てろい。龍が風邪ひくなんてのはちいせえ時以来だからなー」親父なりの心配なのかもしれない

「おっちゃんもおばちゃんもいないんならあたしがついてるよ」千鶴はとことん看病してくれるらしい

「悪いねーこんなバカ息子のためによー。んじゃよろしく頼むよ」

「任しといてよ！友達に聞いた風邪に効く料理作ってやるんだー」張り切る千鶴を見ると逆に気がひけて来たが今は早く寝たくて階段をあがった。

「んじゃ、着替えて寝てろよ！あたしも着替えてすぐ戻ってくるからな」

少しうなづき、部屋に入り着替えベッドに横たわった。

とてつもなくだるくて寒い、すぐに眠りについた・・・

親父が言ってた俺が最後に風邪をひいた俺がまだ小さい時の夢を見た

その時も千鶴が看病してくれた気がする。看病って言っても千鶴が寝ている俺のそばですっとゲームをしてるっただけなんだが・・・

そしたら寝てる俺の額に手を触れて「熱い！冷さねーと！！」と袋いっぱい氷を詰め込んだのを俺の周りに置いていって満足してた。そこへ兄ちゃんが帰ってきてやり過ぎだ！！とめてくれなっかつたらひどいことになったことだろう。

実際その風邪は長引いてしまっていた。

そこで目を覚ました。

時計を見たら4時間は寝てたらしい。額には濡れたタオルがのっけていた。

千鶴も寝てたけどそばにはいてくれたらしい。起き上ろうとすると千鶴も起きた。

「んあー、龍起きたの？どうさっきよりマシ？」

「ああ、大丈夫・・・」

「熱測つとけよ。今、料理あっためてくるからさ」「千鶴がやさしい笑顔で体温計を渡してきた。

脇にはさんで数分待つ、そうしてるうちに千鶴がおぼんに何やらのせてきた

「熱、どうだったー？」

「ん、36.7。」

「まあ微熱つてとこだね、アンタ平熱低いしね。ほら爽子に教えてもらったの」とおぼんからスープの入った皿を渡してくる。どうやら野菜スープらしい・・・。
なにやらこのスープのことを語ってくるが自分自身もおしえてもらったわけでわけわからなくなっていたが結局は具だくさんで栄養が手軽にとれるということらしい。

一口食べると温かさとうまさからホツとした。

「うん、うまいよ・・・」

「お、おう。そりゃそうだろうな・・・ハハ」急に慌てだす千鶴、それにカマをかけてみる。

「これどっから手伝ってもらった？」

「いやー作るうとしたらおばちゃん帰ってきてさー・・・って、ア
！」

「だいたいわかってたよ、でも・・・ありがとな」2人で照れあう。

「明日には治るといいな、もうすぐ球技大会だしな」

「きつと治るよ、千鶴が看病してくれたんだ・・・普通に。」

「普通には余計だったんだ。」

やっぱり千鶴は俺にとって比べようのない存在なんだよな

ありがとう

第三話（後書き）

千鶴視点とか中学時代の千鶴の男子99人に喧嘩で勝ったエピソードを書きたいです。よろしくお願いします。

第四話（前書き）

千鶴の男子相手に喧嘩99連勝の話

第四話

休み時間・・・

「そーいえば、昨日龍に喧嘩100連勝の記録99で止められたって言うてなかった？」矢野が不意に含み笑いをしながら俺に問いかけてきた。

しかし、俺は千鶴がそんなことしてたことをあまりおぼえてなかった。

「あー矢野ちーん！！それは言わないでよ！！」慌てて俺と矢野の間にはいる。

「だってちづに聞いてわからないなら龍に聞く以外ないじゃない」
「どうやら相当聞きたいらしい・・・」。

「やっぱり、あたしから言うよ！！龍に話を盛られてもいやだらね！」「そんなことしねーよと思ったがそれは俺だけではないらしい

「まああれは中三の今ぐらいだったかな・・・」気にせず千鶴は話し続けた。

中三の今頃か・・・もしかしてあの事いつてんのか・・・？

確かに中三の今頃、千鶴はやたら好戦的だったし俺んところに来ては、何組の誰を倒したとかどこ中の誰かを倒したとかやたらしゃべってたような気がしたな。

最初は何言ってるかわかんねーし、千鶴がけんかつ早いの知ってたから気にも止めてなかった。
反応をみると翔太もそうらしい。

そのうちいろんな噂が飛び交っていたと思う。

千鶴が負けたらそいつの舎弟になるから始まり、恋人になるとか坊主になるとかいろいろ經由して

最終的に願い事をなんでも叶えてくれるということに落ち着いた。

そのうち、千鶴に挑む男もいなくなり始め千鶴が無理やり喧嘩し勝ったとか言い始めそれに困った男子共が俺にしか倒せないと、俺に頼ってきた。

正直めんどろでしかない。2人とも（いや厳密に言えば俺が）大人になりやっとなんか小さい頃から続く喧嘩もやらなくなってきたというのは……今さらやらなきゃいけないとは

「……まあそのうち。」

てきとーに流したつもりではあったがその男子たちが誇張して結局100人目の相手が俺ということに決められ千鶴までやる気になってきた。

「ま、誰が相手でもあたしは負ける気しないけど100人目が龍なら箔がつくってもんだね」

あのときは正直困った。千鶴には負けたことはなかったものの中三の女子となれば千鶴といえど女性として見ていい。今までの99人はどのように立ち向かったものだろうか・・・

悩む価値もないと判断し、その日が来るまで何もかんがえないようにした。

千鶴は千鶴でその日が来るまでは俺の家には来なかった。どうやら本気で俺とやるつもりでいるようだった。

そしてその日はやってきた

放課後の屋上。

周りには無数のギャラリィ

早く部活に行きたい俺、早くやりたい千鶴。ある意味利害は一致してる。

しかし怪我をさせたくなければしたくない・・・

ここは、小さい頃の千鶴と中三の千鶴がどのくらい変わってないかにかかっていた。

構えはたいして変わらない、とすれば一発目は殴りかかってくる。

そうとわかった。俺は棒立ちで千鶴に向って微笑んだ。

どうやらそれが効いたらしく怒った千鶴は拳を振り上げ突進してきた。

チャンスは一度のみ、しかも千鶴の単純さにかかっていた。そして近づいてきた千鶴にしか聞こえないほどの声で言い放った。「・・・だるまさんがころんだ。」

すると千鶴の動きがあらさまに鈍った。その千鶴の足を払い、一度お姫様だっこの手前みたいに支えてやった。女子のギャラリもいたのだからギャーという声が響きそれに驚いた俺は千鶴を離してしまい千鶴は尻もちをついた。

それをみたギャラリたちが千鶴が負けたと判断したらしく結果、千鶴の連勝記録は99で止まったことになる。

千鶴は納得いかなかったようだが俺は翔太に呼ばれ部活に行ったためにそこでお開きとなったのだった。

千鶴の話の聞くと俺が使った卑怯ともいえる技のことは言っていない。多分そんな幼稚な手に引っかけたのが恥ずかしかったのだろう。

しかしこの話には続きがある。

部活が終わって帰ろうとすると千鶴が待っていた。

勝負の続きがしたいんだろうと思いき身構えたがそうではなく俺の望み聞きに来たというのだった。

どうやら、最後に落ち着いた噂をながしたのは千鶴らしく、そこはちゃんとしたかったらしい。

望み・・・そんなこと急に言われても思いつかず帰り道で考えることになった。

帰るうちに千鶴に制限をつけていった。金がからまず、めんどくさくないものなど、最早何ができるのか悩んでるうちに家についた。

玄関に置いてある野球グローブを見て思いついた「んじゃ・・・キャッチボールする。でいいか？」

千鶴はそんなことでいいの？と驚くがそういつならと承諾した。

久しぶりのキャッチボール。相変わらず男子顔負けのボールを投げてくる千鶴。

他愛もない会話も久しぶりだったはずだ。

そのうち千鶴が真剣な顔して言い始めた。

「そのうち龍にリベンジするからな！それまでまっとうけ！」

何を言い出すかと思えば、リベンジの宣言だった。しかしそれを聞きあること思いついた。

「・・・じゃあ北幌高校に入れよ。俺はそこに行く。」

ただ千鶴と同じ高校に行きたいがために言った言葉だった。

「北幌か・・・あたしの頭じゃきついけどアンタにリベンジするためならしょうがないね。頑張ってみるかー！！行けたらまた一緒か・・・」

「ああ。」千鶴とまたこの関係がつづいていく・・・正直うれしくて笑みがこぼれた。

そこから千鶴の猛勉強が始まりそして今に至る。

ただ千鶴の高校を決めた理由は2人だけの秘密だ。

第五話（前書き）

千鶴の誕生日の話。千鶴はちなみに6月1日です。

第五話

梅雨に入り始めた5月の末・・・

いつもの5人組の中ではこんな会話をしていた。

「ちづはもうすぐ誕生日だったよね、なんかほしいものとかないの？」矢野はこういうことにはしつかりしている。世渡り上手といってもいいのかもしれない・・・

「私もすつごく聞きたいです。」黒沼もとても興味深々なようだ

「えー、なんかわるいなーラーメンとかおごつてくれればいいよー」千鶴は相変わらずというかこんなのが女子高生でいいのだろうか・・・？

「ちづ・・・あんたそれそこの男子と変わんないから！！爽子、ちづの意見なんか参考にならないよ。2人でなんか考えよ・・・」どうやら俺の疑問の答えは出たらしい。しかしここまで呆れられるほどとは俺も思わなかった。

「龍たちはなんかあげないの？」

「俺はいつものスナック菓子の詰め合わせーw」翔太は中学の頃から千鶴にはこれと決めていた。
なんととっても千鶴が喜ぶんだからしょうがない。

「じゃあ、龍は？」

「あーあ、ダメダメこいつ毎回大したもの送ってきたことねーしさ」

俺の言葉をさえぎるように千鶴が言った。

確かに毎年そうかもしれない。でも去年ははじめてちゃんと用意していたのだが兄ちゃんも同じようなものを買っていたのを知り、結局渡せなかった。

同じものをもらうにしても好きな人からもらうほうがきつといいはずだと思ったから・・・

俺は急にやりきれなくなり教室から出た。

後ろから「大丈夫、龍にはなんにも期待してないからー」と聞こえたが俺には振り向いて返す気力もなかった。

それから、なんとなく千鶴と会うのを避けるようになった。

今までだってこんな関係だったのに、なんだか焦っているように感じた。高校生になり千鶴の兄ちゃんへの思いが俺にもはつきりわかるぐらいになったからかもしれない・・・

夜、俺の携帯に兄ちゃんから電話があった

「もしもし・・・」

「おー、ひさしぶり。最近電話もできてなかったからなーwみんな元気か？」相変わらず陽気な感じが電話越しにも伝わってくる。

「うん、どーかした？」俺の携帯にかけてくるってことは俺に用があるのだろう

「もうすぐ、ちーの誕生日だろ？俺、今年はそっち戻れそうになくてさ・・・つーか夏も厳しそうなんだ。それでさ今年はお前がちゃんとかやれよ。これでも去年は悪かったと思ってるんだからよw」
兄ちゃんはもちろん知っていた。まあ何枚も上手な兄だ。ばれても不思議でない。

「別に気にすることないよ、それで良かったんだ。今年もできたら電話ぐらいはしてやってくれないか？」

「ああ、わかったw」

それからちよっと話をし電話を切った。

カレンダーを見ると6月1日は土曜日。

野球部のスケジュールには練習試合とある。

自然とため息がでた・・・

それから数日後、ちょっとは話すもののやはりギスギスしたような関係が続いた。

どこかやるせない気持ちを部活にぶつけ練習から帰るといつものラニングに向かった。

ランニングしていると余計なことを考えなくていいはずなのに千鶴の顔が浮かんでは消えた

「……じゃまだってーのがわかんないのだったの!!」

千鶴の声に気づきあたりを見回した。

コンビニの前でたむろするいわゆる不良……に注意する不良……千鶴であるが。

「うるせーよ、だりーな」どうやら相手も気が立ってるらしく千鶴を囲む、それを確認する前に足は走り出していた。

呼吸も整えることなど気にせず思いのままをくちにした」……ふれるな」渾身の憎しみが無意識にあふれてきた……

そこからは無音の世界に入ったように対峙する相手の声さえ聞こえなかった。

素手ならかわせた。キャッチャーの動体視力はなめてかからないほうがいい。

しかし、死角からの棒かなにかをわき腹に受けた。もはや痛みなどどうでもいい。千鶴に手を出そうとした。そこには怒り以外は生まれてこない。

すると俺を見た不良達は何かに恐怖を感じたように逃げ去った。この怒り、憎しみどこへ持っていけば……。すると急にあたたかなもの腕をつかまれた。

「……千鶴？」気のせいかもしれないが少しだけ震えていたようにおもった。

「いいんだ、もうそんな暗くて怖い目、あたしのためだったとしてももうしないでよ……」俺は知らず知らずに千鶴を怖がらせて……

そう思った瞬間に千鶴に抱きしめられた

きつく、きつく……

「ありがとな……龍」

「ああ……ただ……離してくれるか？あばらが尋常じゃないくらい痛いんだけど……」
徐々に痛みがでてきて熱く焼けるようだった。

「もしかして、どっか怪我してんの？大丈夫か？」慌てだす千鶴。

正直、今の俺に出来る精一杯のやせ我慢で微笑んだ。

「悪いけど、肩かしてくれ」

「……うん」

帰り道、6月1日の練習試合が決まったこと、4番でスタメンでいけそうなことみんなで応援しに来てほしいことを話した。

いつも以上に口数が多いのは痛みでどうにかなりそうだったからだ。

千鶴はめづらしく素直に聞いてくれた。

試合は明後日、それまでは完治は無理と自分自身でわかった。

次の日、授業はやり過ごせた。

千鶴にはちらちらと見られたが気遣いされたくなくてあまり話せなかった。

部活は調整ですんだのが幸運だった。

タメのマネージャーにだけは見せたが、テーピングだけで普通にプレーできるような怪我ではないと言われたが口止めをした。

ボールを捕球し投げるくらいなら問題ない・・・問題はバッティング。

体の回転は予想以上にあばらにくる。

試合にこんな私情を持ち込むのはあからさまにまちがいだとはわかっていた。しかもただの練習試合・・・でも千鶴のために、いや俺のために何としてもやらなきゃいけないことがあった。

それをマネージャーに伝えると親が医師で痛みどめをうつてほしいと頼んでくれた。

勝負は明日、6月1日・・・

第五話（後書き）

すいません力尽きました。
続きます。

第六話（前書き）

風邪ひいて遅れました。

一日一話の更新は難しいです。

それでは千鶴の誕生日後篇です。

第六話

6月1日土曜日 朝5時30分

こんなに早起きなのはマネージャーの家の診療所で痛みどめをうつてもらったため。

最近、雨が多かったのに今日はきれいに晴れてる。

「そーいえば千鶴に関係することがある日はいつも晴れだっけ・・・」

玄関先で上ったばかりの朝日を見ながらつぶやいた。怪我した部分は相変わらず痛むが気持ちは穏やかだった。

いつものランニングコースを歩いて向かう。できるだけ体に負担はかけたくない。

しばらく歩くとマネージャーが診療所の前に立って待っていた。

「おはよう、お父さんが診察室で待ってるから入って？」

「迷惑かける・・・すまん。」

「いいよ、選手のケアはマネージャーの務めですから！」胸を張り、笑顔で返してくれた。

中に入ると白衣を着た医師が待っていた。

「真田 龍君だね？娘から頼まれた時は驚いたというより呆れたよ。」

・しかしそれほど覚悟をもってやらなければいけないことなのかな？

痛み止めは最終手段と言っている、痛みをとるのではなく一時的に麻痺させるだけのことだ。それはわかってるね？」

「はい・・・きっと誰もわかってくれないと思います。でも俺にとつては今しかできない大事なことだと自負しています。」

先生の目をまっすぐに見つめる。どちらもなにも話さない。少しして先生が口を開いた。

「わかった・・・。君は娘が話す以上に魅力ある男のようだな、ハハ。」

その話の意図が読み取れず後ろにいたマネージャーを見た。すると目をそらされ診察室から出ていった。

「それじゃ患部を見せてくれるかい？」

診察してもらい、痛み止めをうつってもらった。先生はさらにいくつかの条件を提示してきた。

- ・無理なプレーはしないこと。
- ・痛みを感じたら交代すること。
- ・フルスイングは極力さけること
- ・完治しリハビリを終えるまでは診療所に通うこと

最後のがよくわからないがプレーは制限された。

深く頭を下げて診察室を後にした・・・待合室ではマネージャーが待っていた。

「ほんとに迷惑かけたな、ありがとう・・・えっと・・・大島？」

「え・・・？もしかして私の名前おぼえてない！？マネージャーだよ？違うクラスだけど・・・」

「・・・すまん、名前おぼえるのは苦手で。」

どうやら呆れられたようだ、額を抑えて苦笑を浮かべている。

「大沢だよ？大沢 優子。そんでここは大沢診療所！おぼえといてね？」

「ああ、ありがとう。大沢。」

またあとであいさつを交わし診療所を出る。

来た道を歩いて家の近くまで来ると、俺ん家の玄関先で千鶴が素振りをしていた。

「なにしてんの？」

「・・・おっちゃんが朝早く出てったっていうから待ってた。」

俺がふーんと答え腰を下ろすと千鶴も隣に腰を下ろした。

「これ、家の母さんから、昼にでも食べろってさ。おいなりさんだつて。」弁当箱を渡された。

「ん、サンキュ」

「あと、龍のバット、グリップポロポロだったから巻いといた。」

「ああ、そつか。忘れてた・・・わりーな」へたくそではあったが握った感触は悪くない。

沈黙が流れる・・・

「応援、矢野ちゃんに爽子、風早も来るって言ってたよ・・・それでさ・・・」千鶴の声が震えていた。

俺は何も言わず千鶴の次の言葉を待った。

「あたしのためとか言っただけ無理すんなよ！その怪我だってあたしのせいなのに・・・」

千鶴は涙をぼろぼろこぼしながら俺の目を見つめてきた。

「心配すんな、無理するつもりはないし千鶴が泣く必要もない」千鶴の涙拭ってやって笑いかける。

「じゃあ、勝たなくてもいいよ・・・。いや、でも負けるの

は嫌だな。」歯を見せて千鶴が笑った。

「・・・それは無理。」

少し話して千鶴も落ち着いたようだ。千鶴はまだ少し心配そうな顔をしたが、なだめて一旦家に帰した。

俺は準備をして試合会場の市の球場へ向かった。

今日の試合は近くのライバル校北大南高校との練習試合

北幌高校が甲子園に出るためにはこの北大南を倒さないといけないといわれている。

一年の俺にとっては最初の強豪校との試合でもある。

ベンチ入りしたメンバーはウォーミングアップを開始し、俺は大沢に念入りにテーピングしてもらった。

グラウンドに出るとピンが相手の監督に挨拶しに行つて帰ってくるとこだった。

「おい、龍オメー今日先発だ。相手の監督のじいさんがお前にスポーツ推薦で北大南に誘つたらしいじゃねーか？あのじいさんに思いつきり

うらやましがらせてやんぞーウヒヒヒ・・・見てるよ。」下品な笑い声をあげて変な執念を燃やしていた。

なににせよ、これでスタメンは確約されたわけだ。ただ相手の監督に俺がどこまで知られているかが問題である。

そんなことを考えながらうちの先発ピッチャーの肩を温めるためにブルペンに向かう。

「りゅー、応援しにきてやったよ。」顔上げると千鶴、矢野、黒沼、翔太が応援しにきていた。

「下向いてたら勝てるもんも勝てないよ!!顔上げろ!」

四人が来てくれたことがこんなにも心強いのか・・・ありがとう。俺は右手をあげて答える。

アップが終わり、ピンに集められスタメンが発表される。

「おーっし、スタメンな・・・一番西岡、二番松本・・・・・・これでいくから、北大には最近負けっぱなしだからな今日は勝ってあいつらの鼻へし折ってやるぞ」

そして全員で円陣を組み、試合開始

先攻北大南、後攻北幌で始まる。試合は両校譲らずの0対0で進む・

俺は、思ったようにバットを振れずノーヒット。

7回、痛み止めが弱まってきたのか少し痛みが出てきた。まだ守備に支障はきたさない。

集中が途切れかけた瞬間、ピッチャーの球がすっぽ抜けた。

「!」

ミットが間に合わないと判断した俺はいつものように体で止めに入った。

プロテクターはしているものの無理な動きと硬球の衝撃が怪我に響く、結果追い込んでいたバッターには振り逃げされた。

痛みから少しうずくまるピッチャーの先輩がかけよってきた。

「龍、大丈夫か!？」

「はい、大丈夫です。すみません。」

先輩の問いに答え平然を装う。しかし相手の監督は俺の異変に気づいたらしい……

次のバッターがキャッチャーがとらないといけない位置にバントしてくる。

「なめんなよ……!」

歯を食いしばり、一塁ではなく二塁を刺す。

痛みはあったもののなんとかしのいだ。

8回も終え9回・・・

疲れの見えるうちのピッチャーが捕まり最初の打者にヒットをうたれそこからワンアウト一、三塁・・・

ここで点を取られるのは厳しい、しかし打順は相手の一番に回る。

ファールで粘られ5球目、甘いコースに入ったストレートを打ちあげられる・・・

タッチアップギリギリの距離、しかし調子悪いと判断されている俺がキャッチャーやつてるときたら当然来るだろう。案の上外野の捕球とともに三塁ランナーが走り出す。

外野からは好返球、十分間に合う！

ボールをキャッチしランナーと向き合う、止まるつもりはないらしい突進してきた。

ボールの収まる左手に力を入れ相手とぶつかる鈍い衝撃と激痛が体に走る・・・

痛みに、耐えながらミットに収まるボールを審判に見せる。

「アウト！チェンジ！」

思わずため息をつき、立ち上がりベンチに戻ろうとする。すると、脇腹に大きな痛みが来た。

痛みどめが切れたのとさっきのクロスプレーが効いたらしい、立ち止まらざるを得なかった……

するとバックネット越しから千鶴の声がした。

「龍！大丈夫なの！？」少し遠くて見えないがどうやら涙ぐんでるらしい。

「ああ、黙って見てろ。」

俺は痛みを耐えてベンチに戻る。プロテクターを外し座る。ピンが話し始めた。

「テメーら、最終回だ！練習試合だから点がとれなきゃ引き分け、一点とりや勝ちだ。俺様は引き分けなんかこれっぽっちも興味ねー！！勝つぜ！幸い2、3、4の好打順。ぜつてーに打て！」

最後は俺か……代打なんかいれんじゃねーぞ、ピン

そして9回最後の攻撃、最初と二番目が凡打と三振に倒れ続いて俺……。

ネクストバッターサークルから出ようとするとところでピンに止められる。代打が頭をよぎった。

「龍、お前に代打なんかたてねーからな！うちに調子悪いからって打てない四番なんかいらねーんだ。それに応援してもらって、四打席

ノーヒットじゃかつこつかねーだろ。」

「わかってる、絶対打つ。」

バックネットに目を向けると四人立ち上がって応援してくれていた。

深呼吸をひとつとしてバッターボックスにはいる。

「おねがいます・・・」

汗が止まらない、体がふらつく、自分の心臓の鼓動だけが聞こえてくる・・・

いや、違う。応援の音が・・・特に千鶴の音がする。

「いけー龍！！場外までぶっ飛ばせー！！」まったく今日あたってない俺に無茶言っんじゃねーよ

ピッチャーの動きに集中する・・・甘く入った初球におもいきりのフルスイングをする。

なるほどフルスイングを制限された理由がわかる。一回でこの激痛、何回も持つはずがない。

バットの芯に当たり打球は申し分なかった。

スコアボードにはサヨナラを表すxと1が記され俺は部員達の手荒い祝福を受けた。

試合が終わり、千鶴との帰り道……

ホームランボールを千鶴に渡す。

ボールには<2009年6月1日 誕生日おめでとぅ>と書いておいた。

「あーあ、ほんとうくなもんくれねーんだもんな龍は……」嫌みは言うものの涙目で受け取った

「わりーな」俺もろくなもんじゃねーなと内心想う。

「でもさ……」そう言いかけ千鶴に電話がかかってきた。

「もしもし？徹？」どうやら兄ちゃんからのようだ。

「うん、ありがと……いいよ、毎年もらってたんだし……あー、うん今もらったとこ……馬鹿みたいだよ、怪我してんのにさーでもうれしかった。今までの中で一番だ。……うん、わかってるよ。……龍と代わる？うん」

千鶴が携帯を渡してくる。

「もしもし？」

「龍か？お前すげーよwホームランプレゼントなんてよく考えたよ。つーか考えても簡単にできねーよw」

「兄ちゃん、ありがとな兄ちゃんに電話もらってなかったら決心つかなかったよ」

「そっか、ちーに届いてよかったな。それじゃまた今度な」

「ああ」電話を切り千鶴に渡す。

「龍・・・ほんとにありがと！！大事にする」

それだけ言い俺の前を歩き始めた。

袖で顔ごしごしやってるところ見ると泣いてるらしい。

俺の気持ちが少しだけ届いた気がした・・・

第七話（前書き）

どうも御無沙汰でございます。

今日はオリジナルっぽいのはさみしました。

第七話

千鶴の誕生日も終わって夏休みも簡単に過ぎて行った。

俺は部活の合宿やら遠征で、遊ぶ暇もなかったのだが千鶴はうちのラーメン屋を手伝いに来てたんで家では会っていた。

「いや〜ちづちゃんが手伝いに来てくれると助かるね〜龍じゃ愛想がねーからなー」

親父は笑いながら千鶴が来ることを喜んだ。

「ま、龍じゃむりだね。やっぱ徹龍軒の看板娘といったらあたしだもんねー」

二人で客たちと大声で笑いあう。まあ俺が店あんま手伝わなくてよくなるし千鶴ならラーメン食わしておけば

ふつうにアルバイトとるより安く済むんだから店的にも助かる。

そんなこんなで過ぎたが誕生日の時に怪我したのが思った以上に長引いたのが困った

確かに安静すれば1カ月そこらで完治するはずだったがシーズン真っただ中の夏場のことだ

ごまかしごまかしやっていくほかなかった・・・

マネージャーの大沢にはほぼ専属かのようにケアをしてもらっていた練習の後のアイシングからテーピング練習が休みの日には診療所に通った。

体育祭の練習も始まったところのこと、放課後

「りゅーうー、今日みんなでラーメン食いに行くからー」千鶴が呼びかけてきた。

どうやら黒沼、矢野の二人を連れてくるようだ。

練習は休みではあるが今日は・・・そう考えていると教室の戸が開き大沢が来た。

「龍くん、今日は練習休みだし、一緒にいこ？」

千鶴は別に俺に用があるわけじゃないし、今日は先生から完治したかどうかの最終判断が下る何にせよ、断る必要はない。

「ああ、そうする。じゃあな」話していた、翔太たちに一声かけ教室を後にする。

*****千鶴side*****

「へえー龍にちづ以外で仲いい女子がいるなんてねーww」
やのちんがニヤニヤしながら話す。でも確かにそうだ。龍が女子と仲良くしてるなんて初めてだ。

でも、顔がわるいわけじゃない。徹に似てるわけだし近づく女の子はいた。でも、野球バカだし

無口あの性格だからすぐ離れていった。

「あの子、誰??」何にしても龍のことだ。気にならないわけない。

「吉田しらねーのかよ?野球部のマネージャーの大沢つつて清楚系美人で有名だぜー?あとな・・・」

ジヨーがぺらぺらとしゃべってくれた。なんかくるみと人気を二分するとかいらんことまで話してきたので無視した。

確かにかわいいと思う。サイズなんか龍の肩ぐらいで黒髪は黒髪だけど爽子なんかより軽い感じで万人受けしそうな感じではある。

「そーいえば、吉田体力測定で総合判定が2位だったって言うてる、それその大沢に負けてたんじゃねーの?」
風早に言われ、ハツと思いだす。

「そうだ!大沢優子!ほぼ完ぺきだったあたしの記録を上回ったただ一人の女!!」

やのちんは呆れて、爽子はなんか変な妄想にふけってる・・・

うーん、まさかそんなとに関わりがあったとは、龍とそんな話なんかすることないからなー

外を見ると龍と大沢優子が肩を並べて歩いている。遠目ではあるが楽しそうだ。

「あの雰囲気はいい感じなのかもねーw」またやのちんがニヤニヤ

とからかってきた。

ヤキモチなんて乙女な感情なのかはよくわかんないけど複雑な心境だ。なんかあたしの知らない龍みたいなの？

ほんとよくわかんないよ・・・

あー！めんどくせー！今度聞いてみよ

大沢とはいろんな話をした。

意外と容姿のわりにサバサバしてて、話しててけっこう楽しかったりする。

でも、千鶴と比べたら女の子だと思っし何より美人だとほかの野球部員やクラスのやつが言うだけのことはあるとおもっ。

そんなこんなで大沢診療所

診察室に入ると先生が待っていた。

「よし、来たね。今日で二カ月ぐらいか・・・よく夏の厳しいトレーニングを怪我しながら乗り切ったもんだ・・・」

呆れ顔で笑う先生、確かに厳しかったと思う。だましましやるのにも限界はある甲子園予選もギリギリで先輩捕手にポジションを譲ることになったり悔しい思いはしたが、自分のやつ

たことが間違いとは感じていなかった。

「はい、ご迷惑おかけします。」

「ハツハ、医者が診察するのに迷惑なんてないよ。むしろ優子がつきまとつて迷惑したんじゃないかな？」

確かに、怪我のケアのために付き添ってくれたがつきまとつてとか迷惑なんて思わなかった。むしろ感謝してるぐらいだった。その意を伝えようとすると診察室を仕切る力ーテン越しに大沢のふてくされたような声がしてきた。

「ちよつとーお父さん！いらないことまで話さなくてよろしい！それに龍くんはそんなこと思わない！」

先生も俺も苦笑いした。

「というこもらしいがそれでいいのかな？」

「はい、迷惑なんて思ってません。」
心なしか小声で話した。

その後、触診とレントゲンをし最終的な判断を聞く。

俺、先生と看護師、そして大沢の四人が診察室にいる。なんだか真剣な空気になり先生はいつになっても口を開かない。

そのうち看護師の女性がプツと嘔き出した。

「お父さん、そんなにためたつて彼、動じてませんよw」

途端に空気が明るくなった。しかし俺には何のことかわからず、大沢を見ると俺以上にオロオロと動揺している。

「こんなのレントゲン写真をみれば一目でわかるわ、痛みはないならもう十分完治してるわよwねえ？お父さん？」

黙っていた先生も急に笑顔になり完治したことを伝えてくれた。

「君が動揺するところが見たかったんだがなー」

「はあ、治ってなくともここに通えばいいだけの話でしたし、最近痛みもなかったの・・・」

俺自身どう反応していいかわからず黙っていただけのことなのだがどうやら動じていないととらえられていたようだ。

「男はどっしり構えている方がいいのよw特に落ち着きのない優子みたいな娘には・・・w申し遅れました、優子の母です。」

「何言ってるのよ、お母さん！」

「そつだ、何をいう母さん！」

賑やかな家族だ・・・言われてみると大沢はお母さんにそっくりだ。そつといえば挨拶もしたことがなかったな

「はじめまして真田 龍です。いつもお世話になってます。」
立ち上がってお辞儀をする。

「あら、身長も高いし好青年じゃない？ねー優子？w」

大沢は何も言うことなく診察室を出て行った。

「そつだ！夕飯食べていたらどうかしら？もう夕方だし」

二人ともニコニコして誘ってくれた。断る理由もないと思っていたが・・・千鶴の事が頭に浮かんだ

(そういえば家来るって言ってたっけ・・・)

「すみません、これから予定がありまして・・・気を遣わせてしま
いけません。」

ほんとならご厚意に甘えるというかごちそうになる方がこの場では
礼儀正しいのかもしれないが断ってしまった。

「残念ね・・・まあいいわ。優子が誘えばいいだけのことだしそ
したらまたの機会にね」

「そうだな、君はオーバートレーニング気味なところがあるから時
々きてマッサージぐらい受けて行くといい。」

二人ともやさしい笑顔で応対してくれた。一瞥し診療所を後にする。

外では大沢が制服から着替えて待っていた。

「あんまり気にしないでね？」大沢が俯きながら言った。

「ああ、夕飯断ったの大沢からも謝ってた伝えといてくれ。」俺に
はそのことしか思い当たる節がなかった。

「えっ？ああ、うん・・・」

少し話して家に向かった。いい親子だ。あの二人から大沢が生まれ
たことも大事に育てられてること
も納得できる。

*****優子side*****

「ふうー、帰っちゃった・・・。」

診療所の前の数段の階段、腰をおろしてボーっとしていると自然とため息がでた。自然にしているつもりでもやっぱり

どこか緊張したり力が入ってたりするなー。特に今日はお母さんまでいたからなー・・・

するとお母さんも診療所の外に出てきた。

「龍くん帰ったの？彼、優子が言うとおりのいい子ねー最近の子であんなしつかりしてるのも珍しいわw」

「あたし、そんなこと言った？てか勝手に夕食とか誘わないでよ！恥ずかしいじゃん！」

「いいじゃないの、嫌じゃないでしょ？」

確かに嫌じゃない、そりゃ恥ずかしいけど今までそんな男子いなかったし、何よりお父さんまでけっこうよく思ってるなんてそうあることじゃない

「いいと思うわよ、龍くん背が高くて真面目、イケメンでやさしそうだしw優子のタイプでしょ？お母さん賛成よ」

ニコニコと隣に座ってきた。私は顔が熱くなるのを感じて顔を反対に反らした。

「お母さんに話すんじゃないかなー・・・こっちは気が気じゃないよ」

「でも龍くんって鈍感そうじゃないwもつとちゃんと言わないとあれは伝わらないわねー」

思い浮かぶ点はいくらでもある。誰がどうみたって鈍感だ。

「わかってるよ……。」

「じゃあ今度、夕飯にでも誘いな？ま、おかあさん達がもつと話したいただけけどーw」

からかってから立ち上がり戻って行った。

「はあーやつぱり話すんじゃなかったー……。」

でも、ちょっとだけ自分の気持ち確かめられたからよしとしようかなー

そういえば、夕飯なんてどうやって誘えばいいんだろ？

「ただいまー」

店側から入ると客でにぎわっていた、嫌なタイミングで帰ってしまったようだ。

案の上親父から声をかけられる。

「おお、ちょうどいいや人手が足りねーから手伝え！」

まあ、わかつていたことではあるがこんなことなら大沢ん家でごちそうになるのもありだったなと思う。しぶしぶ制服から着替え店に出る。

そのうち千鶴が黒沼、矢野を連れてきた。

何を話しているかはよく聞き取れないけど千鶴一人がギャーギャー騒いでるのはわかる。

あつ千鶴のとも水ねーや・・・

「待たせたな」

水の入ったポットを雑にテーブルに置く

「客が気づく前に替えるー!!!」

まったく嫌な客だ、混んでんだよ、悪いな

けどお前は客と呼べるかも微妙な存在だろ・・・

そのうち客も減っていき千鶴たちも上へあがって行った。やっぱり帰ってきておいて正解だったか。

まあ俺の部屋なんか毎回断りもなく入ってるから変わらねーか

「おう、龍も今日はもういいぞ」

俺も家の方に上がり着替えて部屋に向かった。戸の前につくと千鶴

の音が響く。

「大人 大人つてやのちに男99人たおせんのかー!!」
何を叫んでんだ、意味わからん……。躊躇なく戸を開ける。

「お、100連勝阻止おめでとう龍！」矢野に言われるが全くなん
のことかわからない。

千鶴には俺の部屋なのに入ってくんなどがキレられるし……。ほん
となんだっけ？

「……あの〜……もしかして……」
か細い声、ああ黒沼もいたんだっけ。

「……ふたりは……恋人同士なんじゃ……!!?」

こいつ何言ってるんだろ……。?……。でも俺と千鶴ってそう見える
もんなのか。

「ちがう!!!」千鶴が大きく否定した。

「……千鶴とは男兄弟みたいなもんだ。」

実際、そんな関係と言っていると思う。

でもどっか微妙に感じてる部分もある。よくわかんねーけど。

目の前でギヤーギヤー騒ぐ千鶴の存在……。前と同じなんだろうか。
……。これからもそうなんだろうか……。?
はつきりそうだと言えない俺がいた。

俺が雑誌を読み始めると翔太を呼ぼうとかいうことになった。

黒沼に電話かけさせ、来ることになった。翔太も大変だな・・・同情するよ。

かけ終わると中学の卒業アルバムを見始めた。俺、千鶴、翔太の話で盛り上がる。

すると矢野が俺にアルバムをつきつけ話しかけてきた。

「どお、龍？こーいのの？」

多分、タイプとかの話してんだろーな・・・こいつ誰だっけ？

あーうちの高校いるやつだ

「・・・タイプじゃない」うん、よくしらねーけどタイプじゃねーことは確か。

そのあと、黒沼はどうとか聞かれたけど嫌いじゃねーし、今まで会ったことない感じでけっこう好きだ

まあ友達として、ふっりにすき？とは答えといた。

その後、翔太来て矢野と千鶴にからかわれてた。ほんと大変だな・・・

結局、ピンが乱入してお開きになり見送りに外へ出た。

矢野とピン、翔太と黒沼がそれぞれの帰路につき千鶴と二人になった。千鶴も帰るかとおもったら

何か思い出し聞いてきた。

「そーいやあんたのタイプってどんななのさ！くるみのことタイプじゃないって言い放ってたじゃん！！」

「タイプ・・・？」

ああ、さっきのやつか・・・あいつくるみとかっていうんだっけ？俺のタイプって言われてもな・・・

でも、すんなり浮かぶやつなんて一人しかいねーんだよな。いいんだよな？言っても・・・

「にぶくて単純な奴？」

千鶴が混乱したような顔をした。まあそうなるってわかってた。

「マ、マニアックな趣味だな・・・」

「まーな」

・・・俺のタイプは鈍くて単純な奴。そうやって表現すんのが簡単でいい。

きつと誰にもわかられない。でもそんなこと気にならない・・・。

黒沼に言われて今の関係を微妙に感じたのはこういうことなんだろうって思う。

こんな近い関係なのに、俺にはまだまだ遠く感じる。

この先、近づいたりすんのかな・・・。

千鶴を見るとまだどんな奴か考え込んでた。

あーあ、ほんと鈍くて単純な奴……。俺も人のこと言えねーけど。

第七話（後書き）

大沢 優子 野球部マネージャー

書いてたらAKBのあの人と一文字違いであることに気づきました。そしたらイメージが大島さんになっちゃいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0929o/>

君に届け ~君のそばで~

2010年11月9日14時44分発行